

第2節 2区の調査

1 調査の経過と方法

平成23年9月、堂の前貝塚の範囲内である陸前高田市米崎町字堂の前134-2・6において宅地造成工事が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、試掘調査を経て平成24年8月20日から本調査に着手した。

調査は、平成24年6月グリッドラインに沿って設定したトレンチ発掘での遺跡内容を把握する試掘調査から始めた。その結果、果樹畑耕作によって攪乱を受けている表土下50cm程度で縄文時代の遺物包含層を検出した。重機によって攪乱された表土層を除去し、1区での調査が完了した平成24年8月、包含層の調査に着手した。遺構実測・記録方法、遺物採取方法は1区と同様である。

現地での調査が終了したのは平成24年12月7日であった。

2 遺構の概要と基本層序(第129～132図)

2区の遺構は、焼土跡14基・小穴4基・配石1基・遺物集積1箇所を検出した。

調査区は、標高33～29mの緩傾斜地で、北西へ向け傾斜している。近・現代の果樹畑耕作土(1・2層)を除去すると、縄文土器の大形破片を包含する黒褐色土(3層)が、調査区のはほぼ全域で確認されている。3層より下位の層群は、黒褐～褐色土を基調とした遺物包含層で、包含される土器片の大小、堆積方向、混入物でそれぞれ分層できる。各層は、地形傾斜に沿ってほぼプライマリーに堆積している。

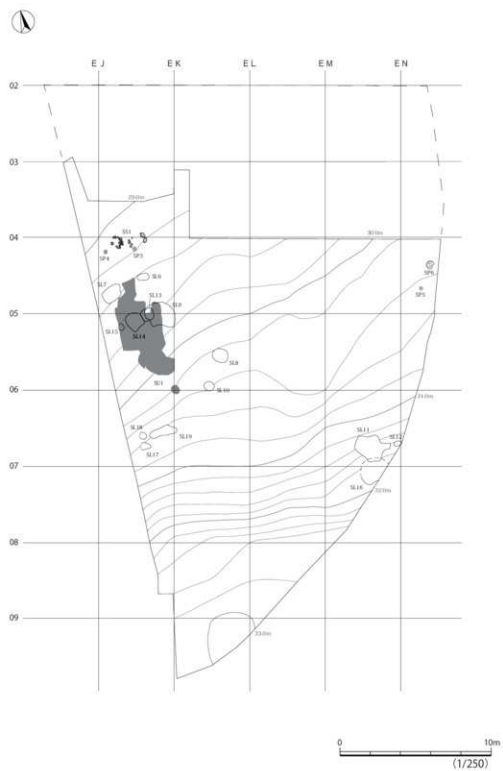
地山(7層)は、黄褐色土に大小の自然礫が多量に混入した層で、調査区内の礫は本層に由来すると推定される。

堆積層の層序変換面上には、一括投棄をうかがわせる縄文土器の大形破片や動物骨の集中が、面的広がりとして見られる層もある。調査区中央部の西端のEJ04・05グリッドでは、一括性のある投棄単位が遺物集中範囲(SU1)として平面的に把握された。

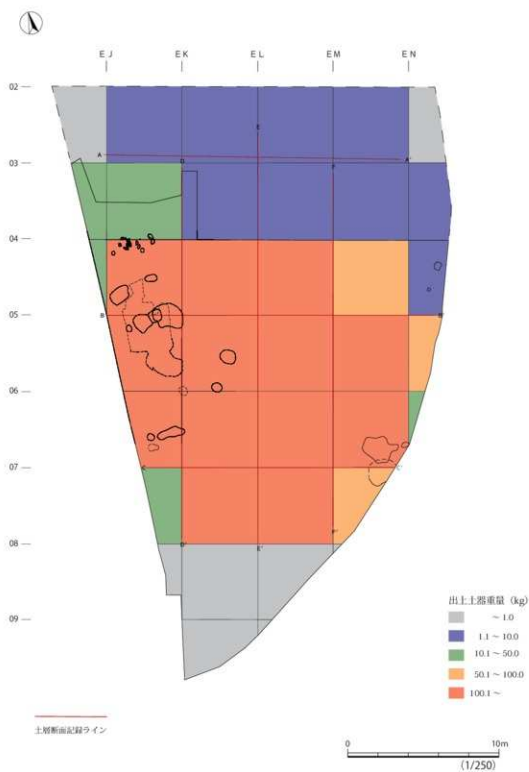
本調査区内から出土した縄文土器片のグリッド毎の重量分布をみると、遺構が検出されたグリッドを中心とした調査区中央部に出土が偏る傾向を指摘できる。



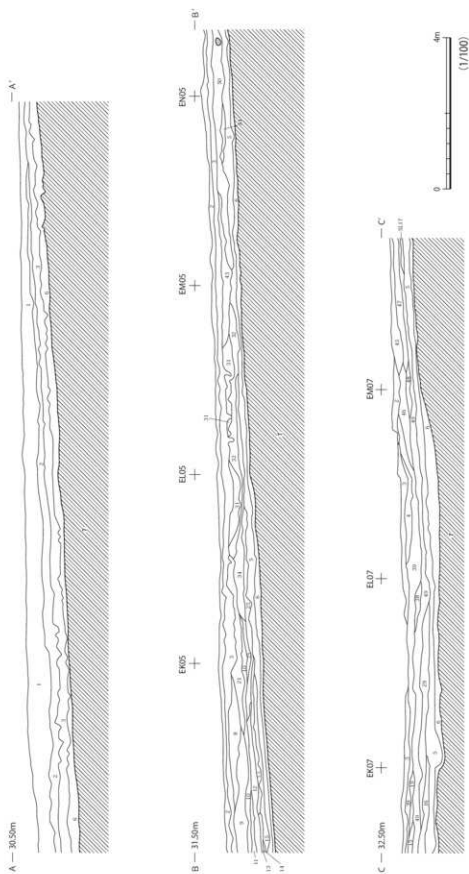
写真2 2区調査状況



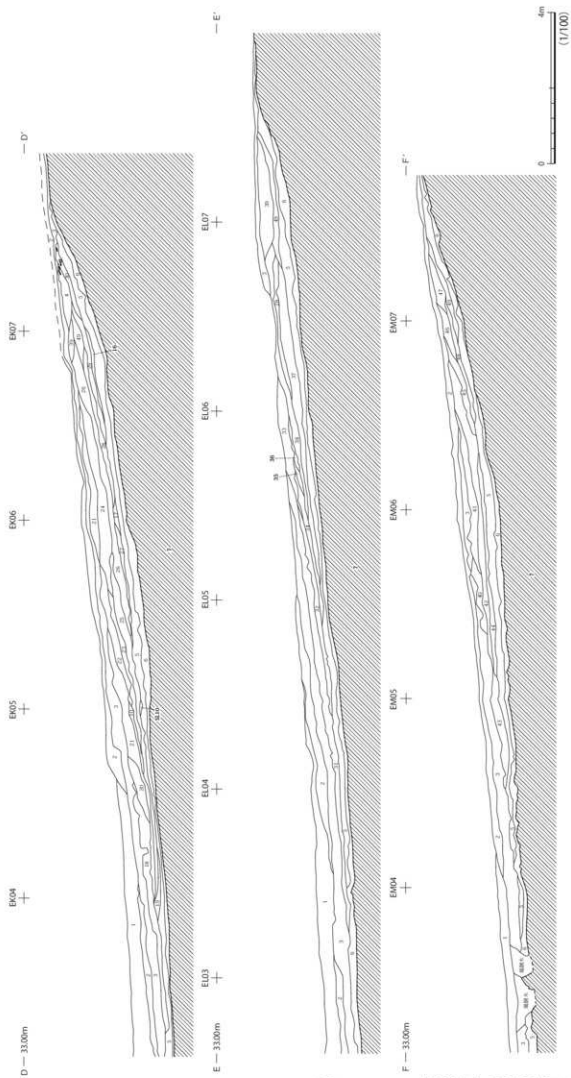
第 129 图 2 区遺構分布



第130図 2区グリッド別出土土器重量分布



第131図 2区土層断面(A・B・Cライン)



3 遺構と出土遺物

焼土跡

SL6 焼土跡 (第 133 図)

【位置】調査区北西、EJ04 グリッド 【規模】80 × 50 × 10cm

SL7 焼土跡 (第 133 図)

【位置】調査区北西端、EJ04 グリッド 【規模】140 × 95 × 10cm

SL8 焼土跡 (第 133・135 図 図版 6・65)

【位置】調査区中央付近、EK05 グリッド 【規模】105 × 95 × 7cm 【出土遺物】石刀1、動物骨1

【所見】炭層上から出土した動物骨は、調査時の観察ではイノシシ肩甲骨と推定されたが、脆弱で採取・同定は不能であった。

SL9 焼土跡 (第 134・135 図 図版 65)

【位置】調査区中央からやや南西寄り、EJ06・EK06 グリッド 【規模】240 × 180 × 10cm

【重複】SU1 と重複、先後は SU1 → SL9 【出土遺物】掻器1、炭化材1 【所見】掘り込みは無く、旧地表面上に構築されたと推定。周辺から動物骨片が多く出土する。炭化材は年代測定資料として採取、3.880 ± 30yrBP(AMS測定)の結果を得た。

SL10 焼土跡 (第 134 図 図版 6)

【位置】調査区中央付近、EK05 グリッド 【規模】120 × 115 × 5cm 【出土遺物】マグロ属椎骨2・イノシシ脛骨1

SL11 焼土跡 (第 134・135 図 図版 6・65)

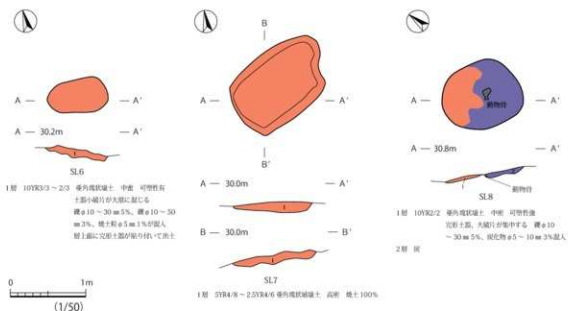
【位置】調査区南東、EM 06 グリッド 【規模】240 × 175 × 7cm 【出土遺物】掻器1、ニホンジカ尺骨? 1(被熱白色化) 【所見】掘り込みは無く、旧地表面上に構築されたと推定。

SL12 焼土跡 (第 134 図)

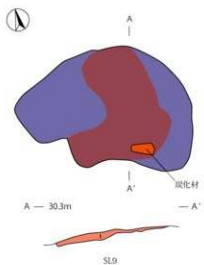
【位置】調査区南東端、EM 06 グリッド 【規模】55 × 35 × 5cm

SL13 焼土跡 (第 134 図)

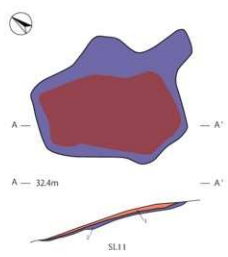
【位置】調査区北西、EJ04・05 グリッド 【規模】80 × 60 × 15cm 【重複】SU1 と重複、先後は



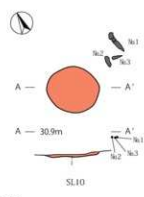
第 133 図 SL6~8



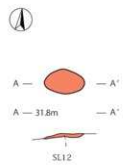
1層 10YR3/4～4/3 赤内塊状土：中硬 可塑性弱
 土部小径が大量に混入。物山由来土φ10～50mm
 50%、礫φ30～100mm30%が混入。1層底に土層
 大粒層が混入。



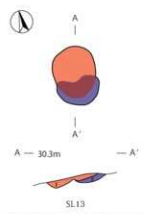
1層 10YR3/3～3/4 赤内塊状土：中硬 可塑性弱
 土部小径が大量に混入
 2層 10YR3/3～3/4 10YR3/2～2/2、5YR3/3が層状に混入する
 赤内塊状土：中硬 可塑性強
 土部小径が大量に混入。物山由来土φ10～30mm
 30%、礫φ10～30mm10%、固化物φ10mm5%、
 焼土粒φ5～10mm3%が混入。



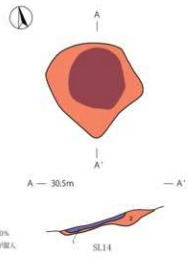
1層 10YR3/2～2/3 赤内塊状土：中硬 可塑性弱
 土部小径が大量に混入
 固化物φ2mm3%、焼土粒1%が混入
 焼土粒は SL13・15・19・20に由来する
 No.1～3は、マゾの磁器片
 No.2は、イノシシ骨片



1層 10YR3/3～3/4 赤内塊状土：中硬 可塑性弱
 土部小径が大量に混入



1層 10YR3/2～2/3 赤内塊状土：中 可塑性弱
 土部小径が大量に混入。礫φ10～50mm10%
 物山由来土ブロック状礫φ10～30mm10%が混入
 2層 10YR3/3～3/2 赤内塊状土：中 可塑性弱
 土部小径が大量に混入。礫φ10～50mm10%
 物山由来土φ10mm5%がブロック状に混入する



1層 10YR3/2上 10YR3/2が層状に混入する
 赤内塊状土：中硬 可塑性強
 土部小径が大量に混入。固化物φ10～30mm10%
 礫φ10～30mm10%、焼土粒φ5mm3%が混入
 2層 5YR3/2～2/2及3/3、10YR3/3が層状に混入する
 赤内塊状土：中硬 可塑性強
 土部小径が大量に混入。物山由来土φ10～30mm30%
 礫φ10～30mm10%、焼土粒φ5～10mm10%
 固化物φ10～30mm10%が混入。



第134図 SL 9～14

SU1 → SL13

SL14 焼土跡 (第 134 図)

【位置】調査区北西、EJ04・05 グリッド 【規模】135 × 125 × 20cm

【重複】SU1 と重複、先後は SU1 → SL14

SL15 焼土跡 (第 136 図 図版 6)

【位置】調査区北西、EJ05 グリッド 【規模】45 × 40 × 8cm

【重複】SU1 と重複、先後は SU1 → SL15

SL16 焼土跡 (第 136 図)

【位置】調査区南東端、EM 06・07 グリッド 【規模】195 × 140 × 7cm (一部調査区外)

【出土遺物】イノシシ距骨 (左) 1

SL17 焼土跡 (第 136 図 図版 6)

【位置】調査区南西、EJ06 グリッド 【規模】70 × 50 × 7cm 【所見】掘り込みは無く、旧地表面上に構築されたと推定。

SL18 焼土跡 (第 136 図)

【位置】調査区南西、EJ06 グリッド 【規模】50 × 45 × 5cm 【所見】掘り込みは無く、旧地表面上に構築されたと推定。

SL19 焼土跡 (第 135・136 図 図版 6・65)

【位置】調査区南西、EJ06・EK06 グリッド 【規模】185 × 65 × 5cm 【出土遺物】敲石 2

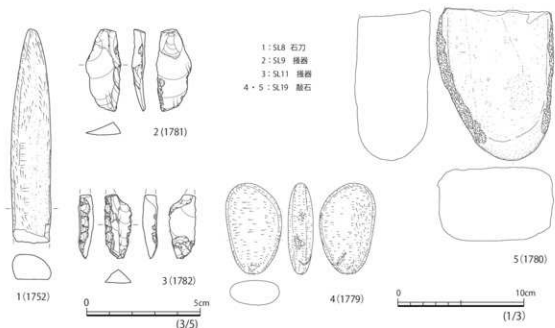
小穴

SP3 小穴 (第 137 図)

【位置】調査区北西隅、EJ04 グリッド 【規模】25 × 23 × 15cm

SP4 小穴 (第 137 図)

【位置】調査区北西隅、EJ04 グリッド 【規模】25 × 21 × 15cm



第 135 図 SL8・9・11・19 出土石器

SP5 小穴 (第 138 図 図版 6)

【位置】調査区北東隅、EN04 グリッド 【規模】22 × 20 × 38cm

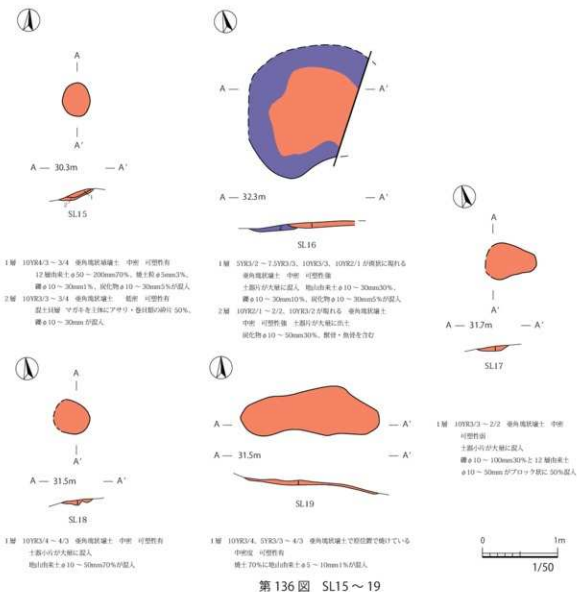
SP6 小穴 (第 138 図)

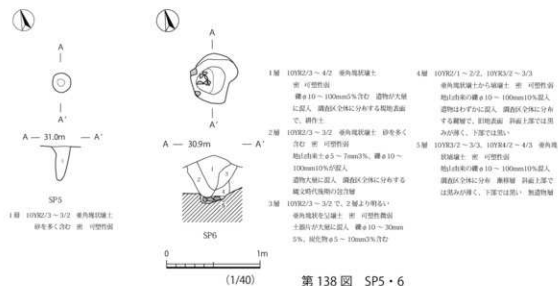
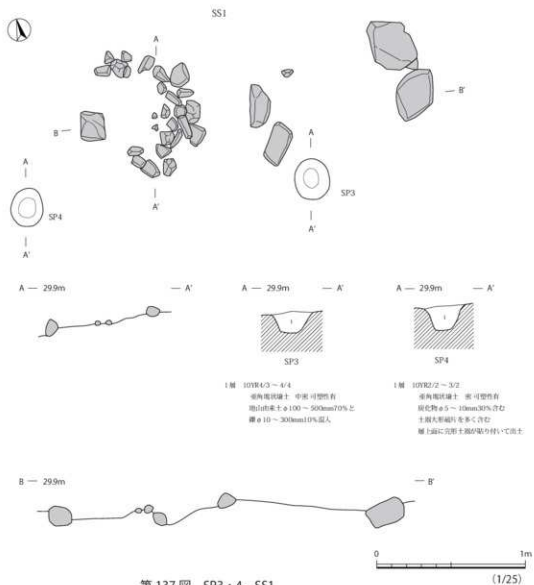
【位置】調査区北東隅、EN04 グリッド 【規模】53 × 40 × 52cm 【所見】底面から検出された礫は、柱根固めのため配置されたと推定される。

配石

SS1 配石 (第 137・139 図 図版 7・65)

【位置】調査区北西隅、EJ03・04 グリッド 【規模】2.5 × 1.0m 【出土遺物】石鏝 1・搔器 1・礫器 1 【所見】東側に大形礫 1 と大小礫で構成された半円形の石組み、西側に大形礫 4 による方形石組みを検出した。東側の石組みは石囲が状であるが、内部に焼土の堆積や被熱の痕跡は見られない。





遺物集積

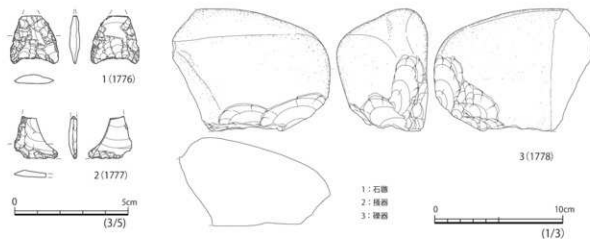
SU1 遺物集積 (第 140～142 図 図版 7・48・49)

【位置】調査区北西、EJ04・05・06、EK 05・06 【規模】7.7×3.0m 【重複】SL 9・13～15 と重複、先後は SU 1(土器投棄)→SL 9・13～15 【出土遺物】縄文土器 9(中期末葉)、動物骨(シカ・イノシシ・マグロ等)

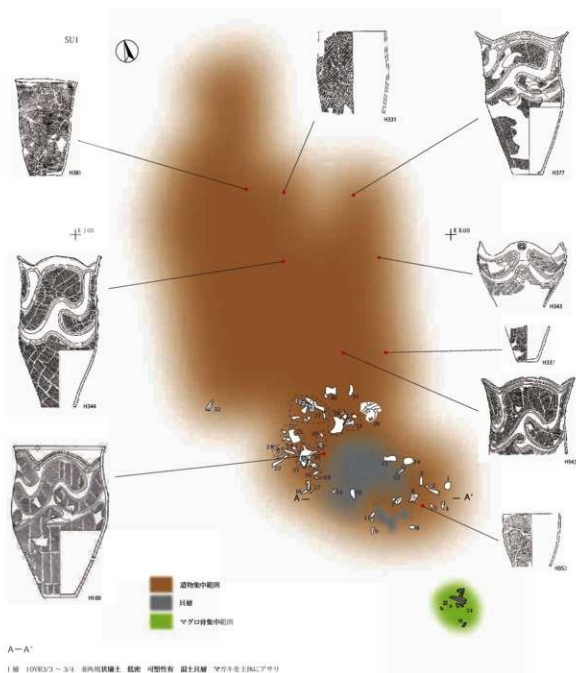
【所見】EJ05 グリッドを中心に貝層とともに、土器片と動物骨の集積範囲を検出した。範囲の北側に集中する土器片の中で、一括廃棄(復元可能)を推定されるまとまりは 20 ケ所程度を数えた。

動物骨は範囲の南側に集中し、シカ・イノシシの四肢骨、マグロの椎骨等が視認された。マグロ椎骨の一部は 3～6 点連結して検出された。貝層の主体は破碎されたマガキで風化が著しい。動物骨も脆弱で、原形を崩さずに採取するのは困難であった。範囲の南端の EK06 グリッド・ポイント付近にマグロの骨の集中が見られた。

一括投棄されたと推定される土器片集中箇所では、斜面高所側の南西方向に底部が検出され、正立して置かれた土器が、地形傾斜に沿って倒れ破碎したと推定される。土器片包含層は、薄い間層をはさみ上下 2 層に分かれる。重複する焼土跡は、土器片の一部を覆っていることから、土器投棄後に形成されたと推定される。貝層の一部はサンプリングし水洗別を行い、微細な遺物まで取り上げた。

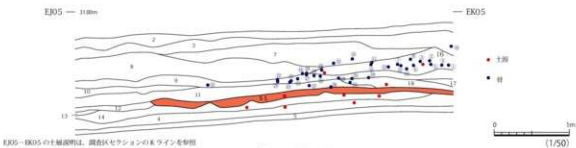


第 139 図 SS1 出土土器



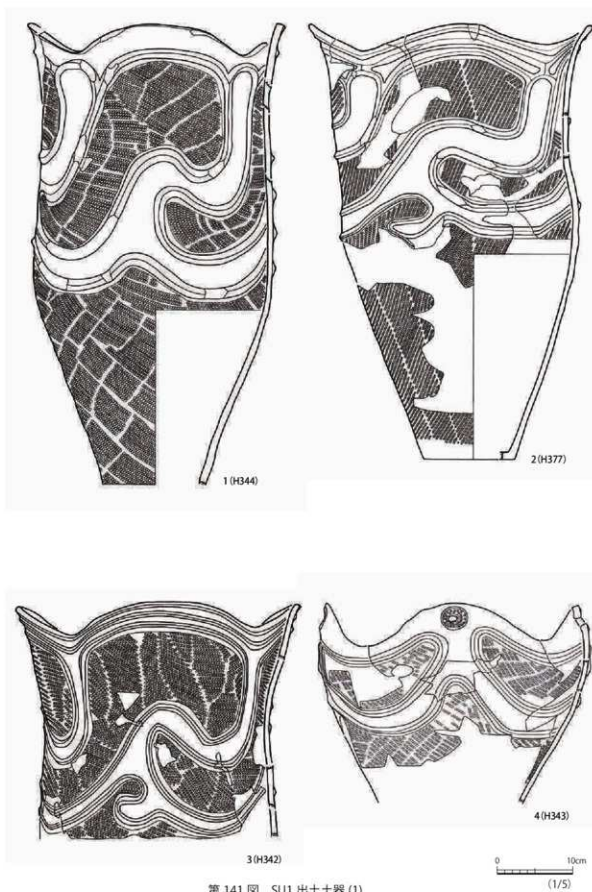
A-A'

- 1層 10YR5/3～3/4 赤褐色鉄質土、低密・可塑性有、腐土混層、マガネ土(6%)アサリ
 柱礎(80×90、50%)存在、礎径10～30mm認め、マガネ集中(2)に散
 在、シカ・イノシシの骨屑等も存在
- 2層 10YR4/3～3/4 赤褐色鉄質土、高密・可塑性有、焼土(灰土)50～200mm70%、
 焼土粒径5mm3%、礎径10～30mm1%、灰瓦片径10～30mm5%
 の存在



E305-EK05の土層断面は、調査区セクションのKラインを参照

第140図 SU1



第 141 图 SU1 出土土器 (1)